

2013年(平成25年)12月15日(日曜日)

児童の挑戦 住民が支援

秋田 ヒマワリで地域を彩る

秋田県大館市積内(しゃかない)地区の夏は、ヒマワリで彩られる。栽培を担うのは積内サンフラワープロジェクト実行委員会。メンバーの主力は地域住民と企業、地元の積内小学校の児童だ。収穫した種から食用油を製造、販売にも取り組む。子どもの職業意識を育もうという試みは、地域活性化や住民の結束強化にもつながっている。

活動は一昨年、スタートした。積内小(児童278人)の五十嵐(おさむ)校長(60)が提唱。「すべては未来を担う子どもたちのために」を合言葉に、地元のみちづくり協議会を母体にした実行委(日景賢悟委員長)が主導する。狙いは児童の職業意識醸成だ。総合学習の時間を作業に充て、栽培から種の収穫・搾油、食用油製造、流通・販売に至る全過程を体験させる。活動は3年目を迎え、地域の協力態勢も充実してきた。

今年の栽培面積は休耕田などの2・5倍。児童だけでは、手に負える広さではない。手伝いの輪に加わった住民は、婦人会を中心に100人以上。趣旨に賛同した地元企業も34に上り、従業員たちが仕事の合間に駆け付けた。



ヒマワリの花を刈り取る積内小の児童ら
=9月4日、大館市

ユニークなのは、販売収益が教育資金として学校に還元されている点だ。昨年度は売り上げや市の助成金

から経費を差し引いた89万円を、6年生が対象の教育宿泊研修などに充てた。活動で生まれた児童の職業意識の芽を、地域を挙げて、さらに大きく育てていこうという試みでもある。

看板商品の「積内向日葵(ひまわりあぶら)」は今年、秋田県内のスーパーに加え、首都圏の百貨店にも初めて並んだ。五十嵐校長は「交流の輪が広がっている。児童が社会経験を積む機会も増えた」と手応えを口にする。

地域と連携した取り組みが評価され、実行委は昨年度「地域づくり総務大臣表

彰」を受けた。キャリア教育の模範事例を学ぼうと、県内外からの視察団も絶えない。

日景委員長(44)は言う。「手探りで始めた活動だったが、今では子どもと大人がそれぞれの役割を理解している。まちづくりに主体的に関わる住民が増えるよう、活動を続けていきたい」



イベント会場で「積内向日葵」を販売する児童たち。10月19日、大館市岩瀬の「たけのこ館」前

取材を終えて 「積内方式」、県内外に

積内地区の婦人会は今年、ヒマワリの種を使ったお茶や、花をかたどったフルーツシャーベットを販売。収益を学校や地元の公民館に還元した。児童に刺激を受けたからだという。秋田県横手市の浅舞小学校は

昨年、島根県浜田市の雲雀丘小学校は今年、地元NPOなどと協力してヒマワリ栽培を始めた。いずれも「積内方式」を参考に、地域の絆を編み直す狙いだ。積内地区の人口は7200人余

り。人口減と高齢化が進む。縮小する地域を持続させるためには、子どもを含めた全世代の社会参加が欠かせない。積内の活動が注目されて、県内外で広がりを見せているのは、そんな切迫した事情が共通しているからだろう。(秋田魁新報社大館支社・嶋崎宏樹)